琉球大学学術リポジトリ

音楽と社会を繋ぐコンサート「きっかけ vol.2」ージェンダー・信仰・芸術について考える演出付きコンサートと舞台ー

メタデータ	言語: ja 出版者: 国際地域創造学部国際言語文化プログラム 公開日: 2022-04-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: フランケ, クラウス メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002017907

Ryudai Review of Euro-American Studies No.66, 2022

音楽と社会を繋ぐコンサート「きっかけ vol.2」
－ジェンダー・信仰・芸術について考える *演出付きコンサートと舞台*－

クラウス・フランケ

1．はじめに

本報告書では、20 世紀初頭に芸術界を改革したダダイズム（ダダ）から中期のシュールレアリズム（超現実主義）までの芸術を紹介する。1916 年 2 月 6 日スイス・チューリッヒ郊外のシュピーゲルガッセにあるカフェ・ヴォルテールで起こった芸術革命により、当時の美術界には大きな変化がもたらされた。1910 年、(2) のような絵を描いていた (1) マルセル・デュシャン (Marcel Duchamp: 1887-1968) が、1916 年に油画の制作を放棄し、抽象的なコラージュ (3) を作るようになったのはなぜだろうか。

(1) デュシャン [1]

(2)Joueurs d'échecs(1910)[2]

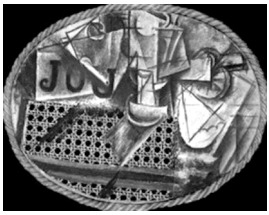
(3)Collage(1916)[3]

19 世紀末からわずか数十年の間に、人々の生活は加速度的に変化した。社会は揺れ、科学進歩によって従来の価値観が崩壊した。そうした時代の中で、ダダに多大な影響を与えた 3 人の人物がいる。潜在意識・夢と精神分析の解釈に関する論文で、人間に全く新しい世界観をもたらした精神心理哲学者フロイト、人生哲学の中で価値観の再評価を求めたニーチェ、1907 年に相対性理論で空間と時間の全く新しい理解を生み出したアインシュタインである。この 3 人が発見した新たな世界観こそがダダの始まりである。ダダは芸術のジャンル

を超え、高尚だった芸術を生活のレベルに下げ、芸術と生活の境界を破壊し、全ての物はあらゆる物と繋がっていることを表現した。芸術の新たな意味と内容を求め、形式からの脱却を目指した。以下の絵 (4-6) はダダの最初の一歩に過ぎず、ダダという芸術は、あらゆるジャンルの枠を超え、無限に芸術表現の可能性を探っていったと言える。

(4) ハンナ・ヘッヒ [4]

(5) ワシリー・カンディンスキ [5]



(6) パブロ・ピカソ [6]

しかし、その頃の芸術は現実とは程遠い美しくきらびやかな題材ばかりがモチーフとなり、芸術が完全に伝統から脱却することは叶わなかった。ブルジョア家庭のリビングルームやサロンの絵画や彫刻は、美術館のように飾られたままであった。では、なぜ芸術の伝統が破られる必要があったのだろうか。次節では、その「きっかけ」を考察する。

2．文明のビッグバン第一次世界大戦 (1914-1918)

ダダ芸術に最も刺激を与えたのは、第一次世界大戦である。ヨーロッパの国々は技術進歩の髄を、闘いと破壊のために利用し、若い兵士は「クリスマスには帰って来られる」というプロパガンダに押され出征したが、彼らはクリス

マスまでに帰るどころか、戦争は4年も続き1700万人もの死者を出した。第一次世界大戦の殺戮兵器は、人々の命を奪い、芸術・音楽・文学といった目に見えない創造力や、人間の尊厳と魂をも破壊した。詩人ヘルマン・ヘッセは自身の小説に登場する主人公Klingsorを通して、以下のように述べている。

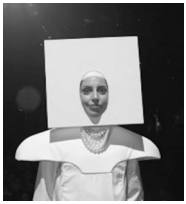
> …我々の尊い理性は狂気になり、我々のお金は紙になり、我々の機械は銃を撃って爆発することしかできず、我々の芸術は自殺行為です。我々は沈没する…

戦争が遺したものは壊れた世界と、何千年にも渡り育んだ文明・精神文化・思想や価値観の揺るいだ修復不可能な屋台骨であった。芸術家は絶望のどん底に突き落とされたと言っても過言ではない。国民全体が希望と気力を失った当時、愚かさには愚かさを、狂気には狂気をもって向き合うしか表現の道はなかったのである。それは、人々が権力者に賛同し、熱狂的に踊らされたこと、そしてそれが自分たちの愚かさであることに気付いたからである。そのような中で、若い芸術家達は狂気から脱し、あらたな世界を構築すべく、原点に帰する芸術の探求に乗り出したのである。

3．最初のダダイスト

最初のダダイストは、第一次世界大戦中、中立国スイスに逃れてきた知識人・詩人・画家・ダンサー・兵役拒否者であった。スイスでカフェ・ヴォルテールを設立し、作品を発表したのである。マルセル・デュシャン、エミー・ヘニングス、マルセル・ヤンコ、ソフィー・トイバー、ハンス・アープ、フーゴ・バル、トリスタン・ツァラ等による史上最大の芸術革命となった[7]。1916年当時、ダダ芸術家達の作品は反芸術と呼ばれ、展示はおろか理解すらされなかった。しかし、ダダ芸術家は権力者やBourgeoiseの優雅な装いに反発し、これまでの芸術ルールに対し反骨精神を露にした結果、現在では芸術史上最も画期的な革命であったと評価されるに至った。20世紀の動きの中には、多少なりともダダの名残りが見られ、多くの現代美術はダダに根ざしていると言って

も過言ではない。例えば2013年のレディー・ガガによるパフォーマンス(7)は100年前のアンドレ・ブルトン(8)にその原型がある。また、1995年にドイツ議会をポリプロピレンで覆い隠した環境芸術家クリストのアイデア(9)は、ダダイストのマン・レイが1920年に発表済みである(10)。



(7) レディー・ガガ[8]

(8) アンドレ・ブルトン[9]

(9) クリスト[10]

(10) マン・レイ[11]

ダダは常識を破り、アカデミック的芸術を破壊したと言える。斬新・画期的・過激という言葉が適しているだろう。いま我々が触れる奇抜な表現は斬新とは言い難く、もはや繰り返しに過ぎないと言えるのではないだろうか。

ところで、「ダダ」とは一体何を意味するのだろうか。ダダ運動の創始者達は詩人・作家・哲学者・芸術家であり、彼らにとって最も大事な「言葉」に絶望するという共通の境遇に直面していた。それは「言葉」が戦争を引き起こしたという「絶望」である。イデオロギーや政治プロパガンダの乱用、真意が失われた「言葉」の使用を止め、言葉を解体しようとしていたのである。言語が世界の認識を支配し、国家を作り、逆に国家が世界の分離を生み、紛争を生むと考え、言語を捨て、純真無垢になる試みは、当時大きな挑戦でもあった。ダダはフランス語で「揺れ木馬」、アフリカの聖なる牛の尻尾、イタリアのある地域では乳母、ロシア語では「はい、はい」という意味を持つ。また、かつ

てスイス・チューリッヒにあったヘアトニックの名称でもあった。即ち「ダダ」はダダイストにとって言語の壁を越えた表現手段であったと言える。ダダは100年経った今日もなお理解し難く、その芸術スタイルには画一性がないのが特長である。人は習慣・教育・知識・伝統・規律などに縛られており、こうした「お硬い理性社会」にこそ、戦争の発端があるとしたダダイストは、「アンチ理性」、即ち「型破りなナンセンス」を導入したのである。

かつて、道化師という職業があった。道化師はカーニバルの際、ユニークな格好をし、表立ってはナンセンスなパフォーマンスであるが、高位の人に真実を告げることのできる特権を得た人であった。カフェ・ヴォルテールが設立された1916年2月5日、詩人フーゴ・バルが未来派を思わせるようなブリキの衣装で司教に扮し、意味不明な文章を朗読した。赤ちゃんが指差し、「ダーダー」と言うかのように、戦後の混乱の中で、人々はそうすることしかできなかったのである。以下、フーゴ・バルの初めての音響詩である。

(11) フーゴ・バル [12]

Karawane, von Hugo Ball

jolifanta bambla o falli bambla
grossiga mpfa habla horem
egiga goramen
higo bloiko russula huju
hollaka hollala
anlogo bung
blago bung
blago bung
bosso fataka
u uu u
schampa wulla wussa olobo
hej tata gorem

eschige zunbada
wulubu ssubudu ulu wassubada
tumba bahumf
kusa gauma
bahumf
gaga blung

ダダイムズは戦争が価値観を破壊し、世界を不条理に変え、精神世界を破壊したところから誕生した。第一次世界大戦末期には、フランス、ドイツ、アメリカでダダギャラリーが設立、ダダ雑誌が創刊され、ダダのマニフェストが書かれた。しかし、ダダは、反芸術・反理想主義・反合理主義・反ブルジョワの色が濃く、何事にも「反感」を持っていたことから、建設的な芸術様式には至らなかった。また、戦争が残した空白への対応に過ぎなかったため、ダダイズム革命のエネルギーは、1923 年には使い果たされ、ダダ芸術を生んだカフェ・ヴォルテールは、半年しか存在しなかった。しかし、新たな芸術が求められていた当時、ダダイストの思想は急速に広まり、シュールレアリズムという芸術運動に合流したのである。代表的なのは、スペインの 3 人の芸術家である。カタルーニャ出身の画家サルバドール・ダリ (Salvador Dalí : 1904-1989)、映画監督ルイ・ブニュエル (Luis Buñuel : 1900-1983)、アンダルシアの詩人フェデリコ・ガルシア・ロルカ (Federico García Lorca : 1898-1936) である。なお、この 3 人の芸術家の関係性は第三幕で取りあげる。

４．芸術界を動かした「フランス６人組」

フランスでも、新しいスタイルに挑戦する動きがあった。ダダが半年で衰退したのに対し、この「フランス６人組“Les Six“」の作曲家たちは、音楽を牽引し歴史に名を残した。ルイ・デュレ (Louis Durey: 1888-1979)、アルテュール・オネゲル (Arthur Honegger: 1892-1955)、ダリウス・ミヨー Darius Milhaud: 1892-1974)、ジェルメーヌ・タイユフェール Germaine Tailleferre: 1892-1983)[13]、フランシス・プーランク (Francis Poulenc: 1899-1963)、ジョルジュ・オーリック (George Auric: 1899-1983) の 6 名の芸術家は、ダダイストと同様に理想や古いキリスト教的市民社会の価値観に背を向け、父親世代を踏襲せず、新しいスタイルの発明に心血を注いだ。彼らの新たな美学コンセプトは、「“simplicité " シンプル」で、子供のような素朴さ、明晰さ、純粋さである。彼らの音楽作品はダダのような反骨精神のみならず、「原点に帰る」という精神を前面に打ち出した点で、芸術性が高いと言える。以下では、ダダの自滅から子供への帰還を描写する台本を抜粋する。

(12) フランス６人組 [14]

フランシス：　戦争は生命をつぶす。ダダは市民社会の価値観をつぶす。

レイモンド：　ダダは衝撃を与え、挑戦する、物事を皮肉っている。ダダは破壊的で無秩序だが、ダダから何が生まれてくる？ダダは破壊をもたらす。ダダは立て直す能力あるかしら？

フランシス：　多分、ダダの本来の意味から結論を出せるかもしれない。ダダは赤ちゃんの片言と比べることはできる。また自らの言語がないから自分の言語を見つけたい。新たな出発点。

レイモンド：　ダダ。ダダはフランス語の子供の言語。揺り木馬
芸術を新しくしたいなら原点に帰らなければならない。その原点というのが子供。誰かの子供時代じゃなくて、どちらかといえば子供は比喩的な意味ね。忘れてしまったってことを表しているの。つまり、無垢と純粋のことよ。

サルヴァトーレ：その発言は、いまの時代の進歩とは逆向きのものだな。進歩は、前に向かうことで、後ろに戻ることじゃない。

レイモンド：　戦争に導いたのは技術の進歩よ。

サルヴァトーレ：おれたちの進歩はたくさんのすばらしい欲望を満たしてはくれる。その一方で、法外な思い上がりという罪も重ねる。その罪を、いつの日か致命的な破局で償わされるわけだ。人類は、長い間、空を飛ぶことを夢みていた。行きついた先が、このいまの、空から爆撃だ。将来、別の破局もあるかもしれ

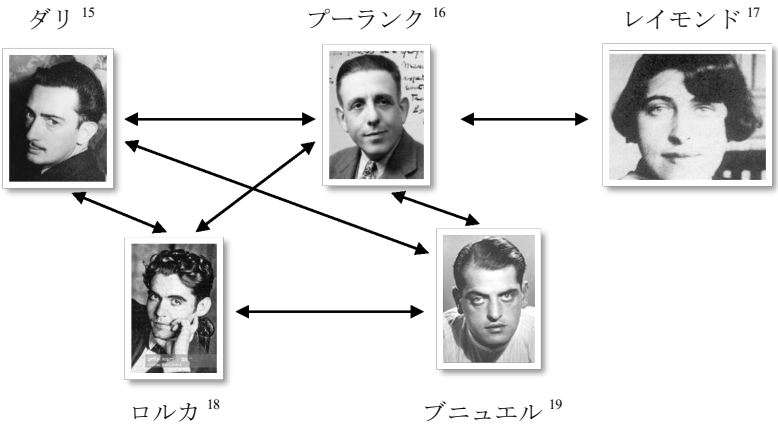
ない。例えば、気候変動、未知の伝染病。すべては進歩の途上で起こることだ。

レイモンド：　でも、子供は過去を表している訳じゃないわ。子供の本質は未来を内にもっているということなの。人生はまさに流れてゆくことで、未来への流れなの。その源流は子供にある。だから新しい芸術のためには子供に帰ることが必要なのよ。

サルヴァトーレ：もっともだ。フロイトも同じことを言っている。だから子供に帰れ！遊びへ帰れ！

当プロジェクトでは、このフランス 6 人組のうち 3 名にスポットを当てる。女性作曲家ジェルメーヌ・タイユフェールを作曲家プーランクの恋人レイモンドに置き換え、画家ダリを登場させる。さらにガルシア・ロルカと映画監督ルイ・ブニュエルを登場させる。彼らは第一次世界大戦後のダダから現代までの芸術を語る上で欠かせない人物であり、この５名の芸術家の繋がりを通し作品を紹介することとした。これが音楽と社会を繋ぐコンサート「きっかけ」である。

(13) 登場人物５名の人間関係



５．舞台プロジェクト「きっかけ２」の紹介

本節では、５人の登場人物（プーランク、レイモンド、ロルカ、ダリ、ブニュエル）について概観した後、舞台の流れについて紹介する。

５．１　プーランク、レイモンド

フランシス・プーランクは、最も好まれる 20 世紀の作曲家の一人で、第一次世界大戦後、前衛芸術を推進する「フランス 6 人組」の中心となり、ピアノ、室内楽、バレエ音楽、歌曲や合唱曲、オペラを作曲した。プーランクは同性愛者だったが、当時としては珍しく法学部を卒業した知性と教養ある幼なじみの女性、レイモンド・リノシエ（Raymonde Linossier:1897-1930）も愛していた。レイモンドは美術史にも優れ、国立アジア美術館、ギメ美術館で指導する立場にもありながら、自作の戯曲や小説を発表するなど精力的に活動していた。プーランクにとってレイモンドは「理想のひと」で、彼女と一緒なら人生の設計が叶う、と信じていた程である。しかし、不幸にも 1930 年 1 月 30 日、レイモンドは亡くなり、プーランクは枕元にレイモンドの写真を置き、生涯を通じてレイモンドの死を悼んだと言われている。1936 年 8 月に、プーランクはノートルダム・ド・ロカマドゥール教会を訪れ、小さな礼拝堂で黒い聖母マリア像と出会った。聖母マリアの発する精神的エネルギーに圧倒され、その場にひれ伏して祈り捧げる思いで見上げたその黒い聖母マリア像に、レイモンドの幻影を見たそうである。この体験を機にプーランクは再びカトリックの信奉者となり、沢山の教会音楽を作曲した。礼拝堂にあった小さな絵葉書には「黒い聖母の連祷 Litanies de la Vierge noir」と書かれており、この日の夜にホテルで児童合唱とオルガンのための合唱曲を仕上げている。この合唱曲「黒い聖母の連祷」は当舞台の第 2 幕で歌われる。

５．２　ロルカ 、ダリ、ブニュエル

詩人フェデリコ・ガルシア・ロルカは、1898 年グラナダ周辺の肥沃な田園地帯ベガに誕生した。農夫の父、教師の母に影響を受け、幼い頃から詩人になりたいという夢を抱いていた。しかし、当時のフランコ将軍のファシズム体制

で逮捕、銃殺された。この早すぎる死によってロルカの芸術創造は断絶されることになった。

ロルカがマドリード大学に通っていた頃、画家のダリや、後に映画監督となったブニュエルも同大学で学んでいた。この 3 人は友情を育み、とりわけロルカとダリは親密な関係にあった。

(14) ロルカとダリ [20]

ほどなくしてダリとブニュエルはパリに移住し、1929 年に交友関係が破綻したと言われている。一方では、ロルカとダリはどちらも同性愛者であるが故に起こした喧嘩が、他方では映画監督ブニュエルの最初の映画「アンダルシアの犬」にロルカが違和感を覚えたのが原因であると言われているが、真偽は明らかではない。当時、俳優としても活躍していたアンダルシア出身のロルカが、映画「アンダルシアの犬」への出演を断ったことは明らかで、ブニュエルは残念がったと言われている。映画「アンダルシアの犬」はシュールレアリズムを代表する傑作であるが、「満月」にかかる細い雲と、満月に見立てた女性の白目に、鋭いカミソリを滑らせるシーンはあまりに衝撃的である。監督ブニュエルがシュールレアリズムをもって表わしたかった世界観は、奥深く容易に説明できる世界ではないが、少なくとも芸術家ダリは理解し、映画「アンダルシアの犬」の制作に関わった。

ロルカについて書いた伝記作家イアン・ギブソンは、「当時、スペインで同性愛者に生まれたことは最悪の悲劇だった」と記している。特にアンダルシア州で最も時代遅れの町グラナダは、1492 年以降厳格なカトリック支配が施行

され、同性愛者はイスラム教徒やユダヤ人と共に町から追放されたのである。

1919 年からマドリードの「レジデンシア・デ・エストゥディアンテス」という学生寮で生活し、前衛芸術に高い関心を持つ友人ができたとはいえ、ロルカの恋愛は不幸のままであった。イアン・ギブソンは、「当時のヨーロッパでは最もリベラルな場所であったとしても、同性愛は「欠陥」の烙印を押された」と指摘する。ロルカとダリは親しくなったが、ダリはアンダルシアの天才詩人ロルカの才能を賞賛しながらも、次第に遠ざかっていった。またブニュエルは同性愛者ではなく、ロルカとも親しくなれず、ロルカは孤独を味わうこととなった。

スペイン内戦が始まった直後の 1936 年 8 月 16 日、ロルカはグラナダで逮捕された。理由は、ロルカが先頭に立って反ファシズムのマニフェストに対する署名活動をしたこと、またロルカが同性愛者であることが挙げられる。翌日、グラナダ郊外のビズナルの近くで、仲間の囚人たちと手錠をかけられたまま銃殺刑となったが、一発目の銃弾では息の根を止められず、慈悲の一撃という名目で 2 発の銃弾が発砲された。

ロルカの最期の言葉は、「私の月はどこ？」であった。「月」はロルカの作品で中心的な存在であり、死と苦悩の象徴である。月は強烈に冷たい世界を表し、作中に暴力を描写する度に月が現れる。太陽が不在のため、自らの弱い光に頼るしかなく、温めるには、血の犠牲を求めるのである。従ってロルカの月は、太陽の光が差し込むことのない世界、言い換えれば死であり、神話タナトスの世界を象徴していると言える。ここで、ロルカが死の直前に記した一節を紹介する。

> 私はしばらくの間、すこしだけ、1 分、1 世紀の間、眠りたい、私が死んでいないことを皆に知らせたい、私の唇の中には金の馬小屋がある

芸術に注いだロルカの満たされない愛と情熱の苦しみを抜きに、ロルカの作品は理解できないだろう。

５．３　第 1 幕　～ダダと戦争～

舞台第 1 幕では、上述したダダ作品と、子供らしさが出たプーランク作品を中心に上演する。プーランクはジャンジャック・ルソー的価値観「原点に帰れ」「子供に帰れ」を反映させ、歌曲集「動物詩集」、「4 つの子供の歌」やメロドラマ「子象ババールの物語」等、子供が元気に遊ぶ様子を想像させる音楽を作曲した。フランシスと呼ばれるプーランクと、彼の幼なじみのレイモンドは、やがて結婚し子供を授かる。舞台は、メロドラマ「子象ババールの物語」におけるババールとセレストの結婚式と、フランシスとレイモンドの結婚式の場面で幕が閉じる。

５．４　第 2 幕・第 3 幕　～芸術と同性愛～

第 2 幕と第 3 幕には、音楽と社会を繋ぐコンサート「きっかけ」の真髄が盛り込まれている。フランシスとレイモンドは結婚し娘を授かった。10 歳になったマリ・アンジュと一緒にクリスマスイブを過ごしているところで幕が開く。クリスマスツリーの下にはプレゼントが置かれている。マリーアンジュは両親と本を読んだ後、就寝する。フランシスとレイモンドは前夜のパーティーの話を始める。妻レイモンドはある格好いい男性に少々心をときめかせたと言ったことにフランシスは嫉妬を覚える。二人の心が乱れ始めるが、話題は翌日に持ち越し眠りにつく。その深夜、夢とも現実とも取れぬことが起こる。フランシスとレイモンドはトランス状態で起き上がり、お互いにこれまで隠していた秘密を告白する。レイモンドは、バカンス中のホテルで出会った若い男性に心惹かれ、夫と娘を置いて彼を追ってもいいと思うくらいだったという他愛もない話であるのに対して、フランシスは、ある朝、浜辺で裸で泳ぐ少年に出会い、その魅力に憑りつかれたという話だった。しかし、1 回ではなく毎日通ったという事実に、レイモンドは酷く動揺する。赦しを乞い、愛を誓うフランシスをレイモンドが拒んだところで夢は終わる。朝になり、娘マリーアンジュがベッドに飛び込んで来る。フランシスは、居なくなった妻レイモンドを探すが、事故で即死したと知る。失意のため作曲出来なくなった父フランシスをマリーアンジュは慰める。二人は、12 世紀初頭から主要な巡礼地となっている

フランス南部のノートルダム・ド・ロカマドゥール教会[21]へ向かう。その教会にある黒い聖母マリア像（ヴィエルジュ・ノワール）には不思議な治癒力があると言われており、フランシスはそこで祈りを捧げたが、ここで自身の本性を知ることになる。

(15) 黒い聖母マリア像[22]

第 3 幕は、映画監督ブニュエルと画家ダリが映画「アンダルシアの犬」を観るシーンで幕が開く。映画鑑賞の途中で機械が故障し、二人の話題は作家ロルカの思い出話しになる。ロルカは多彩な芸術家であったが、人権差別の弾圧を受け秘密裏に殺害されたことに二人は思いを馳せる。ロルカの死を知ったプーランクは、面識は無くもロルカに捧げるバイオリン・ソナタを作曲した。音楽とダンスを中心にロルカの生涯を表現することで、ダダ、そしてプーランク、ロルカ、ダリ、ブニュエルの息の長い繋がりを表現する。

6．LGBT の現状

プーランクとロルカは、セクシュアルマイノリティーであり、LGBT における G（ゲイ）であったと伝えられている。ロルカは、スペインのファシスト支配者に逮捕され、ゲイであるというだけで処刑された。今でこそ LGBT をカミングアウトし理解者を求め、運動を起こすことは可能であるが、例えばナチスドイツ政権下では、ユダヤ人だけではなく、同性愛者も迫害を受け、歴史に

深い傷跡を残している。本舞台プロジェクトは、LGBT に対し厳しい時代に名を残した芸術家達を通して 21 世紀の現在もなお続くこの問題を考える「きっかけ」となるよう企画した。

LGBT 者が社会の偏見の目を感じるという点は、現在まで改善されていないだろう。20 世紀初頭のヨーロッパは、淫らな性関係は犯罪として処罰され、ナチス政権下では死刑されたこともあった。同性愛者は全ての公民権を失い、性的障害として厳しい弾圧を受けたため、一般人にとっては世間に知られる恐怖は大きく、秘密にすべきことであった。しかし、芸術家は繊細なセクシュアリティを個性とし、芸術創造に昇華させることができた。

制裁社会の中で同性愛者は、生きるために二重生活いわゆるカムフラージュか内面世界への逃避という二つの選択肢があった。 19 世紀、多くの同性愛者は結婚し家庭を築いた。それが典型的な生き方だったからである。例えばドイツの作家トーマス・マンは 1905 年にカティア・フォン・プリングスハイムと結婚し、6 人の子供をもうけ、自分の性的アイデンティティについて公に語ることはなかったが、日記には同性愛に傾倒していたことが記されている。また作品の中でも自身の心の対比を扱い、自らの同性愛的な裏付けは、小説「トニオ・クレーガー」や「ヴェニスに死す」の中にも認識できる。

日本の三島由紀夫も厳しい日本社会の中で本性を仮面で隠し、ある女性と結婚し子をもうけ、社会的には夫であり父親であった。1949 年 24 歳で書いた代表作『仮面の告白』は、同性愛者としての苦悩を心理学的に分析した小説であり、主人公こうちゃんを通して三島自身の思いを代弁している。

覚醒体験（三島由紀夫『仮面の告白』より抜粋）

それが殉教図であろうことは私にも察せられた ..... そのたぐいない裸体は薄暮れの背景の前に置かれて輝いていた ...

張り出した胸にも、引き締まった腹部にも、やや身をよじった腰のあたりにも、漂っているのは苦痛ではなくて、何か音楽のような物憂い逸楽のたゆたいだった。

矢は彼の引き締まった・香り高い・青春の肉へと食い入り、彼の肉体

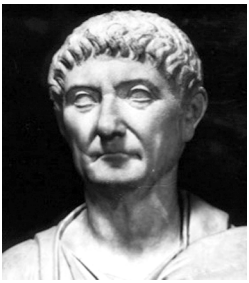
を、無上の苦痛と歓喜の烙で、内部から焼こうとしていた。.....
その絵を見た刹那、私の全存在は、ある異教的な歓喜に押し揺るがされた。私の血液が奔騰し、私の器官は憤怒をたたえた。この巨大な、張り裂けるばかりになった私の一部は、いままでになく激しく私の行使を持って、私の無知なじり憤ろしく、息づいていた。私の手はしらずしらず、誰にも教えられぬ動きを始めた。私の内部から暗い輝かしいものが足早くに攻め昇ってくる気配が感じられた、と思う間に、それはめくるめく酩酊を伴って迸った。

上記以外にも、ハインリッヒ・フォン・クライスト、ハンス・クリスチャン・アンデルセン[23]などが挙げられる。また作曲家ヘンデル、シューベルト、チャイコフスキー、プーランクなども性的マイノリティと自信喪失、自己嫌悪、抑うつと闘ってきた人物である。同性愛の芸術家は性的アイデンティティを公にせず、彼らの個性や感性を作品に投入する秘めた才能のおかげで、現実世界から芸術世界へ逃避し、創造の世界に没頭することが可能である。芸術家という鎧、二重生活、即ちカムフラージュのおかげで地位を維持しながらタブーから避難していたと言える。

7．同性愛の象徴としての聖セバスチャン

舞台ではプーランクとロルカの性的アイデンティティについて直接的に言及せず、スクリーンに「聖セバスティアン」を浮かび上がらせることで代弁する。

伝承によると、セバスティアンという名は3世紀にキリスト教に改宗した殉教者セバスティアヌスに由来する。ローマ帝国軍隊長という立場で、囚われたキリスト教徒を慰めていたが、町の市長などを改宗させていたことが発覚し、ディオクレティアヌス皇帝により処刑された。



(16) ディオクレティアヌス皇帝[24]

(17) グイド・レーニ (1575-1641)[25]

聖セバスチャンを同性愛者が好む傾向は、三島由紀夫小説にも綴られている。これは、イタリアのルネッサンス画家達が、木に縛られ矢に貫かれた裸の青年、聖セバスティアンの姿をホモエロティックに描く傾向が著しく強くなったためであると言える。身体を貫く矢の痛みではなく、恍惚感さえ感じさせる矢は男性器とも解釈可能である。殉教者セバスチャンは、そのような意味で同性愛者の秘かな守護聖人となっていった。多くの芸術家は聖セバスチャンの姿から霊感を得ていた。例えば作曲家クロード・ドビュッシーは舞台作品「Le Martyre de Saint Sébastien」で、映画監督のデレク・ジャーマンは 1976 年に「Sebastiane」というエロティックな聖人を描写した映画で、スキャンダルを巻き起こした。また、カタルーニャ出身の有名な画家ダリも、聖セバスチャン (18) を何度か取り上げ、聖人への尊敬の念を表していた。こうした尊敬心はロルカも持ち合わせていた。

(18)Saint Sebastian[26]

8．当プロジェクトの円環と意義

1936 年 8 月 18 日、まさにロルカが殺害された日に、作曲家プーランクはロカマドゥール教会に到着した。ロルカの死の知らせに大きな衝撃を受けたプーランクは、ロルカに追悼の意をこめてバイオリン・ソナタを書いた。また、フランス語に翻訳されたロルカの３つの詩に曲を付けているが、１幕の「ダダ」

で用いた作品とは異なった作風も見られ、プーランクがロルカの繊細な内面に共鳴したと思われると同時に、プーランク自身が心に負った深い傷によって芸術精神を熟成させたと言える。

世界を震撼させた２つの大きな戦争は、人間のみならず芸術をも根絶した。否、人間自体が人を殺し、精神を壊し、自然を破壊し、希望を捨てたと言える。ロルカ、プーランク、ダリ、そして多くの芸術家は作品が理解される以前に、人としての尊厳が否定されたと言って良い。過去の戦争から 76 年経った現在において、果たして人間の性についての理解・人としての尊厳はどれほど保たれているのだろうか？自由を求めて挑戦した「ダダ」精神は、現代人の心を自由にしたのだろうか？人と人とが分かり合える社会なのだろうか？筆者の投げかけは、技術が進化し、無責任なヘイトスピーチなどの書き込みが横行する今こそ、声を大にして伝えたいのである。また、大衆化されつつある世の中において、少数であっても誠実に芸術の真理を謳っているものに対し、立ち止まって耳を傾け、心の目を開くことが大切になってくるのではないだろうか。その心を育てるのがまさに芸術である。赤ちゃんが純白に成長していくように、大人こそ汚した心を童心に戻す努力をすべきなのではないだろうか。それは筆者自身が自らの生き方に投げかける問いでもある。

註

[1] https://www.wikiwand.com/en/Marcel_Duchamp

[2]https://en.wikipedia.org/wiki/File:Marcel_Duchamp,_1910,_Joueur_d%27%C3%A9checs_(The_Chess_Game),_oil_on_canvas,_114_x_146.5_cm,_Philadelphia_Museum_of_Art.jpg

[3] https://www.pinterest.co.uk/pin/502855114625286469/

[4]https://en.m.wikipedia.org/wiki/File:Hoch-Cut_With_the_Kitchen_Knife.jpg

[5] https://www.eternels-eclairs.fr/tableaux-kandinsky.php

[6] https://www.pablopicasso.org/still-life-with-chair-caning.jsp

[7] デュシャン（ダダの創始者の一人）、ヘニングス（ダダの母体）、ヤンコ（画家、仮面製作者）、トイバー（表現ダンスとマリオネット製作者）、アープ（コ

ラージュ製作者、彫刻家、詩人)、バル（詩人、反芸術運動家、新単語発明家)、ツァラ（詩人、同時多発詩の発明家)。

[8] https://www.thedailybeast.com/vmas-2013-wildest-moments-lady-gaga-miley-cyrus-and-more-video

[9]https://www.reddit.com/r/OldSchoolCool/comments/ejjiiz/andr%C3%A9_breton_photographed_by_man_ray_1920_circa/

[10]https://www.reddit.com/r/bizarrebuildings/comments/7av874/wrapped_reichstag_by_christo_and_jeanclaude/

[11] https://flickr.com/photos/boijmans/2238931989

[12] https://poetryandsound-fall2013.blogspot.com/2013/11/tuesday-nov-26th-dada-poetics-and.html

[13] ジェルメーヌ・タイユフェールは、フランス 6 人組の中で唯一女性である。

[14]https://dadaparis.blogspot.com/2013/02/m-jean-cocteau-le-bluff-sur-le-moi.html

[15] http://lgbthmuk.blogspot.com/2007/11/little-ashes-were-dali-and-garcia-lorca.html

[16] https://sh.wikipedia.org/wiki/Francis_Poulenc

[17]http://www.lacooltura.com/2017/04/raymonde-linossier-partigiana-se-stessa/

[18] https://www.bloodaxebooks.com/ecs/category/federico-garc-a-lorca

[19] https://www.cinemagia.ro/actori/luis-bunuel-2030/

[20] https://rayovirtual.medium.com/garc%C3%ADa-lorca-el-vanguardista-27ea4a1d8131

[21] 伝説によると、キリストの死後、イエスの母の僕がガリアに逃れ、この地に黒い聖母像を彫ったと言われている。

[22] https://www.a12.com/academia/artigos/litanies-de-la-vierge-noire-de-rocamadour

[23] アンデルセンの童話「人魚姫」の中に、同性愛が示唆されている。

[24] https://www.welt.de/kultur/gallery7883568/Staatsmaenner-und-ihre-Ruecktritte.html

[25] https://commons.m.wikimedia.org/wiki/File:Guido_Reni_-_Saint_Sebastian_-_Google_Art_Project_(27740148).jpg

[26] https://wanford.com/saint-sebastian-dali-by-salvador-dali/

閲覧：2021 年９月２４・２５日

参考文献

Rupert C. Allen (2012) *Psyche and Symbol in the Theater of Federico Garcia Lorca*. Univ of Texas.

Hugo Ball (2011) *Zinnoberzack, Zeter und Mordio: Alle DADA-Texte*. Wallstein Verlag GmbH

Luis Buñuel (2013) *My Last Sigh: The Autobiography of Luis Bunuel.* Vintage Reprint Edition.

Heinz Bütler, Alexander Kluge (2016) *Was ist Dada? Alive* - Vertrieb und Marketing.

Richard Burton (2004) *Francis Poulenc*. Hushion House.

Heinrich Detering (2002) *Das offene Geheimnis. Zur literarischen Produktivität eines Tabus von Winckelmann bis zu Thomas Mann*. Wallstein Verlag.

Karen Genschow (2011) *Federico Garcia Lorca*. Shurkamp Verlag Berlin

Jason Goldman (2015) *Subjects of the Visual Arts*. St. Sebastian glbtq Encyclopedia Project.

Hermann Hesse (1985) *Klingsors letzter Sommer*. Suhrkamp Verlag 19. Edition.

Guido Knopp (2012) *Weltenbrand*. Piper Verlag: München.

Wolfrang Kruse(2013) *Zivilisationskrise und Moderne Kunst*,

Bundeszentrale für politische Bildung

Agustin Sánchez Vidal (2009) *Buñuel, Lorca, Dalí, El enigma sin fin*. Editorial Planeta, S.A.

Joachim Schäfer(2021):*Der Heilige Sebastian*,aus dem Ökumenischen Heiligenlexikon,2021-www.heiligenlexikon.de/

Alfred Sobel (2015) *Gute Ehen werden in der Hölle geschlossen*. Fe Medienverlags GmbH.

Leslie Stainton (1999) *Lorca A Dream of Life: Farrar*. Straus and Giroux: New York.

Stefan Wimmer (2016) *Der Dichter Federico García Lorca und sein lyrisches Spanien*: Deutschlandradio: Berlin.

塚原 史 (2003)『ダダ・シュルレアリスムの時代』、筑摩書房 .

藤田治彦 (2008)『ダダ : 前衛芸術の誕生』、創元社 .

三島 由紀夫 (2003)『仮面の告白』、新潮社 .

Gedanken zum Bühnenprojekt “Kikkake 2”

Claus Franke

Das Bühnenprojekt„Kikkake“ist der Versuch gesellschaftlich-relevante Themen mit Kunst zu verbinden.In der zweiten Folge der Reihe-die erste fand im November 2019 statt- werden die Entstehung der Dada- Bewegung, Homosexualität und Kunst, Kunst und Religion sowie der Erste Weltkrieg thematisiert.

Am Ende von verlustreichen und zermürbenden Schlachten standen nicht nur Tod,Hunger und Zerstörung.Dieser Krieg rief auch eine tiefgreifende Erschütterung traditioneller Werte und zivilisatorischer Sinnvorstellungen hervor. Auch die Kunst war ein Opfer des Krieges geworden.Die Künstler waren verzweifelt.

Und so gingen sie auf die Suche nach einem neuen Weg.Sie suchten eine „elementare Kunst”, die den Menschen vom Wahnsinn und der Absurdität der Zeit heilen sollte. Das war der Beginn der Dada-Bewegung,die im ersten Teil des Bühnenprojekts thematisiert wird.Die ersten Dadaisten waren eine kleine Gruppe von Intellektuellen, Dichtern,Malern,Tänzern und Kriegsdienstverweigeren, die während des 1.Weltkrieges in die neutrale Schweiz geflüchtet waren. Denn die Schweiz galt als sicher. Dort gründeten sie das „Cabaret Voltaire".

Obwohl das „Cabaret Voltaire" nur sechs Monate bestand, breitete sich die dadaistische Idee schnell international aus. Gegen Ende des Ersten Weltkriegs entstanden in Frankreich, Deutschland und den Vereinigten Staaten Dada-Galerien, wurden Dada-Zeitschriften gegründet und Dada-Manifeste geschrieben. Aber am Ende hatte sich die Bewegung totgelaufen. Ein Grund hierfür war, dass Dada in allem und zu allem eine „Anti-Haltung“ besaß. Dada war Anti-Kunst,Anti-Idealismus,Anti-Rationalismus,Anti-Bürgerlich. Aber konnte Dada auch konstruktiv sein, und ein die Zukunft tragendes neues Kunst-Programm entwerfen? In dem Bühnenprojekt wird eine Lösung angeboten, die eine Künstlergruppe in Frankreich postulierte, die Komponistengruppe „Les Six“-bestehend aus sechs jungen Komponisten, darunter auch einer Frau (Im Bühnenprojekt sind es stellvertretend drei Künstler). Sie gehörten zu jener Generation junger Franzosen, die sich-ähnlich den Dadaisten- nach dem Ersten Weltkrieg

vehement von den Idealen und Werten ihrer Väter abwandten und einen neuen Stil formen wollten. Ihr neues ästhetisches Konzept sollte eine neue Tonkunst gestützt auf dem Geist der Klarheit und Reinheit hervorbringen. Ihr programmatischer Ansatz war „simplicité“-Einfachheit und kindliche Naivität. Hauptvertreter dieser Bewegung war der Komponist Francis Poulenc. Seine Musik, der Kampf gegen seine Homosexualität, die unerfüllte Liebe zu seiner Jugendliebe Raymonde Linossier und deren plötzlicher Tod, schließlich seine Bekehrung zum Katholizismus werden im Mittelpunkt des ersten und zweiten Teils des Bühnenprojekts stehen. Ferner wird die Unterdrückung und gesellschaftliche Ächtung von Homosexualität am Beispiel des spanischen Dichters Federico Garcia Lorca thematisiert. Sein Leben und seine Ermordung stehen im Mittelpunkt des dritten Teils des Bühnenprojekts.